

# 宮崎県現代俳句協会会報

第57号

2021.12.28

発行

発行所

宮崎県  
現代俳句協会

発行人

山口木浦木

編集・事務局

吉村 豊

〒880-1224

宮崎県東諸県

国富深年 175

TEL・FAX

0985-75-8873

印刷所

(有)鉾脈社

## 巻頭随想

### 俳句はどこへ向かうのだろう

仁田脇一石

現代の俳句はどこへ行こうとしているのか。高齢化が進むなか俳句を詠む人はこのまま減り続けるのだろうか。ある人はじたばたせず流れるままにという。私は先人から学んだ俳句のすばらしさをあとから来る人につなぎたいと思う。全国を見渡すと、その方向性が見えてくる。

テレビ番組「プレバト」が俳句の敷居を低くして、俳句をやりたい人が増えてきている。「現代俳句11月」で瀬戸優理子さんがいう。従来の句会、結社カルチャーセンタールとちよつと違う趣味、教養のひとつとしての俳句をしたい、そんな軽やかな好奇心旺盛な行動スタイルを持つ人が中期以降の世代に増えている。「プレバト」、おおいお茶等の大衆化を軽くみる俳人もいて、俳句とハイクに区別しているが、そんな狭

量では俳句は廃れるばかり。かつて同番組で東国原さんは上京した折の句「まるでシンバル移り来し街余寒」を提出し、夏井いつきに激賞された。そういう枠にはまらない軽やかな俳句にあこがれる人をどう掬えるか、発表できる自由な場を提供するか。

ここで現在の俳句界の主流をなす歴史的仮名遣いについて考える。読売新聞の投句欄の選者四人の選四十句について調べてみると（十一月十八日付）、や、かな、けりの切字を除いた八行ワ行の歴史的仮名遣いの句は六句で、同じ日の短歌欄は四首で意外と少なかった。短歌は俵万智の「サラダ記念日」で一気に現代仮名遣いが増えたこともある。調べるに宮崎日日新聞でも全国的な傾向と似ている。おおかたの新聞の投句者は仮名遣いについて自由な考えで作っており、そのなかから佳句が生まれている。

そういう型に拘らない俳句は、「現代俳句」の標榜する方向であり、右に述べた俳句に關心を寄せる人達の間を提供する責任があると思う。すでに「現代俳句」ではインターネット化の推進に努め、8月、9月号で宣伝をしているとおり、ホームページで

ンターネット句会を毎月実施して、宮崎から気軽に参加でき、かつての地理的な問題も軽くなっている。これからの宮崎県の俳句を担っていく五十、六十代の人たちの参加できる場の設定は、現代俳句協会の関係で宮崎県現代俳句協会が担い、全国ネット投稿から句会への参加の具体的道筋を作る必要がある。この窓口は広げて既存の句会を問わない自由な参加となるべきである。これからの俳句は今までにない面白い世界が開けそうである。

## 第二十五回誌上句会

令和三年九月十日投句  
各自特選句一句（二点）、入選句三句  
（一点）を選句。句評は特選句のみ。

### 十点句

炎昼を行く炎昼を出るために

長友 巖

・シンプルで季語の使い方が良くて極上

の一句。(山口木浦木)

・極力難儀なことは避けようとするが、  
どうしても逃げられないことがある  
日常。炎昼が効いている。

(仁田脇一石)

### 八点句

ランナーの汗とピアスは輝けり

遠目塚信子

・健康的で良い。美人にピアスは素敵。

(疋田恵美子)

髭剃りはひとりの儀式夏終わる

仁田脇一石

・夏の季語がびったり。

(鈴木康之)

・髭を剃ってさっぱりとしたところで一  
日ははじまる。男性はいいなあ

(清水睦子)

### 六点句

宿直の先生と観る月の海 池水 侃

・「宿直の先生」が学校生活、人生、職  
業、教育など様々な思いを抱かせる。  
また月でなく月の海が大いなるロマ  
ンを感じさせる。

(服部修一)

・昔の思い出なのでしょうね。海辺の学  
校で先生と。月が海に映え、綺麗な情  
景が目に見えます。(藤野々子)  
コロナ禍や夏にマスクといふ絆

清水睦子

・私自身、コロナウイルスを俳句の素材  
として詠いたかったが、本句会では三  
句か。(福富健男)

・コロナ禍の今を表現。(玉木節花)

### 五点句

そのあとの話聞きたし月上弦

池袋 寛

・何、何？あとの話って何なの。早く聞  
きたい。物語があつて楽しい。月上弦の  
ベがあざやかで心憎い。(早川たから)  
黄昏の野菊へいつしかわらべ歌

福島ミチ子

・郷愁を誘う。故郷を想いはらからを想  
い、わらべ唄が浮かぶ共感の一句。

(藤田長汀)

帰れざる故郷恋しき居待月

藤田長汀

・居待月を見ながら、コロナ禍が帰りが  
くても帰れぬ思いを見事に詠んでい  
る。(藤林伸岳)

・コロナ禍で帰れぬ古里が恋しくなるば  
かりと作者の心が偲ばれます。

(川島宏幸)

母の肩叩きて誘ふ遠火花 藤野々子  
スマホより消去の名前秋彼岸 藤野々子  
・彼岸に逝く人を見送り名前を消去。身  
に沁みます。(池袋 寛)

ふるさとは刈田と青田並ぶ国

早稲田りょう子

・コロナ禍の今、ふるさとは黄金色に変  
わりゆく青田が何もなきよう青々と  
光る里を国とは俳諧。(永田タエ子)

・そう思います。(池水 侃)

### 四点句

一山は楽となりけり法師蟬 廉谷展良  
伴奏に遅れて歌う鱗雲 亀田りんりん  
・事実から発しているとしても作句的に  
はとぼけ方が堂に入っている感。場面  
がさまざま想像できて楽しい。(妹尾題弘)

### 三点句

手も足も出ぬ秋暑の畑の荒 池袋 寛  
秋出水伝へテレビの真暗がり 岩切雅人  
命終普遍歌歌と春の月 小倉櫻子  
・命ある全てのものに尽きる命。通り過  
ぎる命を照らす澄んだ暖かい感じの  
月。漢詩を読んでいるような格調高さ  
が感じられます。(早稲田りょう子)

甘き水苦き水飲む蚩かな 倉田玲子  
潮騒の浜木綿の花ほぐすかに 清水睦子  
廃刊の締めは朝刊青林檎 遠目塚信子  
・今年六月で廃刊になった香港の「りん  
ご日報」のことだろう。今の世に言論  
弾圧がまかり通ることへの無言の意  
思表示。季語の暗示。(吉村 豊)

人の世も限りもあらん竹落葉 (吉村 豊)

・限りあるこの身。日々を大事に生き、  
永田タエ子

いつの日かはらりと去りゆく定め。竹  
落葉はよく表現されていると思ひ  
ます。(倉田玲子)

c o v i d 19の棘過呼吸の水の星

(長友 巖)

・水の星が上五中七との対比で効いてい  
る。(桑原淑子)

春風に絵馬ことごとと鳴りやまぬ

福富健男

・「春風」や「絵馬」には春のんびりと  
した希望がありますが、「ことごとと  
鳴りやまぬ」は不安とともに警告のよ  
うなものを感じます。

(亀田りりん)

百枚田の囲む古墳や曼珠沙華 藤田長汀

## 二 点 句

夕虹や苦労話のファイナーレ 海蔵由喜子

空を飛ぶ車に乗りて天の川 海蔵由喜子

・夜の高速道路を走っていると本当にそ  
んな気持ちになります。(梶原敏子)

虫鳴くや会いたい人に会えるよう

梶原敏子

下駄預けほつとしている鳳仙花

倉田玲子

爽やかや一本負けという痛み 桑原淑子

我が始め無垢でありしかただ寒し

妹尾題弘

・生まれたときは誰もが無垢。誰もが様々

なものを身につけるがまた無垢に戻  
るのか。それに気付いた寒さ・・・誰  
もが寒い。(岩切雅人)

自肅なり四方へ秋声開け放つ

永田タエ子

死ぬといふ人ほど長寿今年酒

早川たから

・この句のように「死ぬ」「死ぬ」と言  
いながら長生きを元気にしたいと思  
う。(海蔵由喜子)

鳥兜花芯に秘むる女かな

早川たから

十六夜の雨は人待ち顔になつて

福島ミチ子

・人恋しいためらいの雨夜素敵

(小倉櫻子)

南風背に草抜く庭の広さかな

踏田 拓

国いかに七寸秋刀魚に箸まどう

吉村 豊

・国の明日にも秋刀魚の高値にも憂える

秋の頃。(廉谷展良)

ぼうと立つおかも可笑しひよつとこ踊

早稲田りょう子

・たしかにひよつとこ踊りはぼうと立つ

だけのおかも可笑しい。あちこちに

笑いが渦巻く。(長友 巖)

一点句  
行きつ戻りつ宙ぶらりんの夏の果て

亀田りりん

マスクして大笑いして夏の旅 玉木節花

来し方を肯う気配夕端居 踏田 拓

その他の句  
鬼の打つソフトボールへ赤とんぼ

池水 侃

かなかなや夢見しころのカナ漢字

岩切雅人

ひたすらに花を綴りし山帽子

小倉櫻子

秋未来だけ見るといふ解決法

梶原敏子

火点るや蚊取線香夜の闇

廉谷展良

声掛ける片隅に咲く桔梗かな

川島宏幸

埴輪女の髪にはらはら初時雨

川島宏幸

螢草むかしの夢にさそひけり

桑原淑子

南国の初秋眩しくコロナの渦

妹尾題弘

炎天や頭垂れて黙を続けるか

玉木節花

ノアの日の豪雨列島水浸し

仁田脇一石

青虫の刻行く青き翅を広げよ

服部修一

ビヤクダンにお手を咲かして憲武展

服部修一

夏豪雨山河人畜無残なり

疋田恵美子

落葉樹林を掠めて流るやハヤブサ2

疋田恵美子

切に乞う疫病退散鴉の声

福富健男

神の旅それはそれはの太っ腹

吉村 豊

さわやかに我は白身で黄味を抱く

山口木浦木

山口木浦木

山口木浦木

## 第五十八回現代俳句全国大会

十月三十日に東京で開催予定だった全国大会の行事はコロナ禍により今年も中止となり、投句があつた一二、〇九六句を二八名の特別選者と一三一名の一般選者が選句して、受賞句の表彰と予選通過句四、二二六句の作品集が発行された。

なお、来年度は九州地区の担当で開催の予定である

会員の受賞作品と得点句

秀逸賞入賞

○森田廣・小山貴子特選

狼も蛍もきれいな息をして

桑原淑子

佳作賞入賞

○衣川次郎・味元昭次特選

幸せなひとから花野を後にする

桑原淑子

五点句

梅雨長し鏡の中に母が居る

玉木節花

四点句

鼻やファシズムが燻っている

小倉櫻子

三点句

ちぎり絵の指の先から冴返る

永田タエ子

冬眠の兜太碑押せば潮を吹く

〃

霧島山麓麦重く踏む無限軌道

福富健男

なお、会員以外で本県から参加の赤須静子さんは以下の句で秀逸賞を受賞された。  
ラの音は外さぬやうに薔薇ひらく

## 第七十回記念宮崎県民俳句大会

十月二十一日に宮崎市の宮日会館で開催された。特別選者の高柳克弘先生を講師に招いての特別講演では、「芭蕉に学ぶ俳句の作り方」と題して、芭蕉が常に新しい句作を心がけたり、予定調和を打破する句に挑戦していたことなど、実作を通して現代に通じる俳論を展開していたことが紹介された。

会員の入選句等

募集句の部 特選句

○加賀東鶴選特選、石川誠一・緒方眞帆子

佳作

根こそぎの流木にほふ水の秋

布施伊夜子

○仁田脇一石選特選

母が来てのり巻きが来て秋桜

亀田りりん

○服部修一選特選

終戦記念日現代史年表を繰る 鈴木康之

募集句の部 入選句

○高柳克弘選入選

長き夜や絵文字もて消す文の棘

早稲田りょう子

○高柳克弘・永田タエ子選入選

騒がしき電波の国や青山河 吉村 豊

○福富健男選入選

コロナ五輪井上康生金メダル 鈴木康之

○本村蠻選入選

八月の忌日のいくつ燐寸擦る

仁田脇一石

○池袋寛選入選

敬老日ドラマ叩いてベンチャーズ

早川たから

○黒木鳩典選入選

きれぎれの防災無線秋出水 藤野々子

○仁田脇一石選入選

ががんぼよ吾も脚細くなりたるよ

妹尾題弘

○服部修一選入選

良夜かなペニーレインでビートルズ

早川たから

さうか田んぼやつてないのかと新米来

早稲田りょう子

○日高まりも選入選

日輪を女神とたたへ晩稲刈る

布施伊夜子

○日高まりも選入選、加賀東鶴選佳作

胸張って歩けばいくらかは涼し

井上秀子

○松田小恵子選入選

石仏の目鼻の模糊と苔の花 池袋 寛  
山口木浦木選入選、高柳克弘選佳作  
鯉跳ねて月を砕くといふ遊び 早稲田りょう子

### 募集句の部 佳作句

○高柳克弘選  
山暮し煙親しく鱒を焼く 仁田脇一石  
○石川誠一選  
独りゐる父の勝手やところてん 池袋 寛

○岩切雅人選

髪梳きし後夕涼み夫を待つ 井上秀子

○緒方眞帆子選

バス逃がし歩け歩けと雲の峰 海蔵由喜子

○草留恵美選

永らへば淋しきことも秋の風 井上秀子

○永田タエ子選

産土はせせらぎにあり余花の雨 疋田恵美子

天高し泣いて笑って児の一日 倉田玲子

○服部修一選

日焼けさせ女ごころを惑わせる 大浦フサ子

稲刈りの終りし村の灯の点る

原田マキ子

君がためポテトサラダが好きだから

亀田りんりん

○日高まりも選

隠居にも日曜うれし鶴来て 布施伊夜子

田の神の化粧原色青田風 池袋 寛

○松田小恵子選

明けやらぬ田にとつとつと稲刈機 藤田長汀

当日句の部 入選句

○川口正博選

瑠璃蜥蜴兜太句碑なる臍の位置 疋田恵美子

## 第四十七回宮崎市俳句大会

例年四月末に開催のこの大会もコロナ禍により七月三十一日に延期されて、行事を取りやめて投句句の選句のみで行われた。

会員の入賞・入選句等

宮崎県俳句協会賞 ○長友巖選特選

新種のランタンキュラス変異株の街

亀田りんりん

UMKテレビ宮崎賞

○日高まりも・田上比呂美選入選

鉄おいて間のある日暮野蒜掘る

池袋 寛

入選句

○布施伊夜子選入選、石川誠一選佳作

古墳二基鎮もる母校椎の花 池袋 寛

○服部修一選特選

一打にて決まる瞬間夏の雲 藤野々子

○日高まりも選入選

合掌解き山焼く男走り出す 早稲田りょう子

○長友巖・石川誠一選入選

道迷ふ古里となり余花の雨 池袋 寛

佳作句

○布施伊夜子・日高まりも選

くしゃくしゃを伸ばし南瓜の花となる 早稲田りょう子

○服部修一選

五月来るこぼれて弾むポップコーン 草留恵美

ジッパ―を閉じてください登山路 疋田恵美子

田を植えて別嬪さんの嫁が来た 桑原淑子

○石川誠一選

妹の齢に驚く初電話 早稲田りょう子

恙なく生きる喜び今年竹 井上秀子

○川口正博選

店先のブリキロボット夏に入る 藤野々子

店先のブリキロボット夏に入る

藤野々子

## 会員の句集等の発行

鈴木康之句集「いのちの養い」

「海原」・「流域」同人の鈴木康之氏の集大成と言える第二句集である。本編に千句弱、余禄に六百余句が掲載されていてその句数に圧倒される。

本編では俳句を始めて日野草城の「青玄」に投句された頃の作品の章「故郷恋」と、退職後宮崎に戻り「海程」に投句して、兜太没後の「海原」における作品までの年代順に「いのちの養い」、「マイウエイ」、「壮心止まず」の章からなる。

句風は内容の重さは別にして表向きは明るく軽妙で、ウイットに富んでいる。

文系の出と思われるが、お勤めが化学工業の会社で御本人の探求心とも相俟って理系にも詳しく、日本各地から世界に至るまで転勤や営業で回られて各地の事情にも通じておられ、作品では図書館の十進分類のあらゆる棚から配合の言葉が飛び出してくるようで、まるで安野光雅の「旅の絵本」のなかの隠し絵を見つけるような楽しみがあるが、鑑賞には国語・漢和・古語の辞典やウィキペディアを総動員してかからねばならない。

基本的には旧かな遣いであるが、口語俳句もあり、しかも宮崎弁や学生時代の京ことばの句もあってニヤリとさせられる。

冬の査定一人ひとりの瞳あり  
羽織来て鄙の論理に睦む春

山河在り掩体壕も春の色

鳥渡るアラビア文字の不思議さよ

疲れたか背泳ぎもある鯉幟

アジャパーと泰山木の花開く

浮島や瀬戸の大河の夏霞

七曜は回り灯籠よすぐに来る

花蘇芳チベット自治区はシナの西

たゆたえども魂は沈まず春の海

三万の魂迎えなん春山河

物置はタイムカプセル貝櫓

矢印は命令形だ苗木市

肥後大変日向は不安菜種梅雨

レガシーの兜太となりぬ聖五月

熱発する地球豪雨は打ち水か

短調の予科練の歌菊花展

### 山口木浦木句集「梯子」

元「白燕」同人・現「子燕」会員・「流域」

同人の山口木浦木氏の第五句集で、平成二十六年から令和二年までの作品が「伴奏」、「涙腺」、「未完」、「隠居」の四章に掲載されている。

作者は意識して説明を避けるという句づくりをされているので言葉遣いは優しいが鑑賞は困難である。読み手は出された句の意味を追うことはせずに心象は心象として鑑賞すべきとは言いながら、心を読み取るのに苦労する。

ただし一句のみの鑑賞でなく、句集のあとがきでこの句作の期間に長年教鞭をとられた大学を定年退職されたことや、お母上や弟さんを亡くされた事などの大きな出来事が記されていて、それに対する作者の心情も述べてあるので、さりげなく書かれた句の中に作者の心境が窺えて鑑賞を助けられる。

曖昧な春に出会って滑落す

男から女へ屋台骨の夏

懸案の落としどころで春を待つ

来し方を卒業生と裏返す

宙ぶりの魂ゆれる爆心地

人望のつららが伸びて縮みゆく

忘れたきことが寄せ来る春の海

捨石も捨駒もある花吹雪

治療なき治療のあとの冬の恋

アリバイは風のアザミに聞いてくれ

父の日や涙ながらの後始末

抱かれて遺骨の夏の静けさへ

正解がないから潜るかいつぶり

蜘蛛の囿にからめとられる法整備

惜別のあとは一気に走馬灯

診断の結果を待たず鳥雲に

専門を離れて視界さわやかに

サックスの顔に目鼻がつく晩夏

軽快に来て見て買って秋なすび

順繰りの露の命のサスペンス

藤田長汀句文集「喜寿の散歩道」

「鷹」・「椿の実」会員・「椎の実」同人の藤田長汀氏の三冊目の句文集である。前半は句集「令和の風」で、後半はエッセイ「望郷」である。

句集では日常生活の身の回りの事象を詠まれた句をはじめ、故郷高千穂岩戸の山河や田畑、神楽や年中行事、育ってきた家族や少年時代の思い出などの望郷の句の他、県内や全国各地の句が収められている。

ことに望郷の句では、私達がそこを訪ねて旅吟するものよりもずっと濃密なものが心に刻まれていて、その思い入れが大きな共感を呼ぶ。

エッセイ集には故郷の山河と神話、戦国時代の戦と家系と氏神、生い立ちと弟妹・早逝された母親のこと等が書かれていて、エッセイを読んだ後に望郷の句を読むと作者の心が伝わってくる。

鯉のぼり未来を拓け令和の子  
公園に声聞きに行く子供の日  
風光る百枚の田に空ひとつ  
三密にあぶれ顔なる穴まどひ  
早引けの山学校や通草熟る  
炉辺の祖母火を育てつつ神楽唄  
春光のほとぼしるかな洗ひ堰  
野遊びや無為の暮しのあることを  
柏餅頬張る笑顔見る笑顔  
母恋のねむの花咲く水車趾  
新涼や神話さらさら岩戸川

初雀手水の鉢に覗きをり  
朝東風や牛は跳ねつつ牛舎出る

その他寄贈を頂いた句集

日高まりも句集「花の庭」

「鷹」・「椎の実」同人の日高まりも氏の第一句集で、平成十五年から令和二年までの作品が年代順に「春の扉」・「恋二つ」・「朝の声」・「空の花」の四つの章に収められている。

日常生活の中での心の動きや家族のこと、小旅行での風景や印象、夜神楽、年中行事などを移りゆく折々の季節と共に独自の感性で詠まれており、季語が自然に寄り添ってハツとさせられる個性のある好句が生まれている。

大げさな表現はほとんどなく、静謐な中にそれぞれの事柄をきちんと詠まれている。

未来とはまだ間に合ふ日男郎花  
一人ずつ子を東京へ蕎麦の花  
太陽に従ふ暮らし花大根  
元朝や教会へ行く革の靴  
流星や刹那の言葉信じ合ふ  
初笑したる淋しさ庭に佇ち  
病弱を隠す花柄あつぱつぱ  
夜の秋舞台いきなり海の音  
行秋や帰路の星空鳴るごとし  
明日のため沈む夕日や原爆忌

年迎ふ卓布に折り目くつきりと  
南風に水仕終へたる髪解く  
あぢさみや小さく点す看取の灯  
母の死を毎日忘れ父涼し

お知らせ

○宮崎県現代俳句協会理事会  
令和四年一月三十日(日)

午後一時から

宮崎市民プラザ 小一会議室

○宮崎県現代俳句協会総会

令和四年二月二十日

午前十時から

宮崎市民プラザ 和室

新春句会 同日午後から同会場

○宮崎県現代俳句協会創立三十周年記念大会

令和四年六月四日 午後一時半から

会場未定

記念講演・全句講評句会・祝賀会を予定。詳細については総会後に案内。

○令和四年度会費納入について

総会出席の方は当日に、欠席の方は左記の会計担当宛てに納めてください。

〒八八六-〇〇〇三

小林市堤三一二五-二〇〇

海蔵由喜子さん

会員の動き

熱心に好句を作って来られた檀上隆さんがお体の不調のために、また遠目塚信子さんが東京へ転居のために今年度までで退会されることになった。誠に残念であるが、お二方のご多幸をお祈りしたい。

編集後記

色々なことがあった令和三年がもうすぐ暮れようとしている。

今年も新型コロナウイルスの猛威に振り回されて、俳句の世界でも全国的に諸行事が中止に追い込まれた。本会でも総会や吟行句会は中止せざるを得なかった。

そんな中に東京オリンピック・パラリンピックが開催され、秋には衆議院選挙が行われて、騒がしい世情を受けての政変もあったが今後のさらなる動きを含んでいるようである。年が明けると冬の北京オリンピックが予定されてこれも疫病や人権問題で騒がれている。

ワクチン接種は順調に進んで秋には急に感染がおさまりかけたが、今またオミクロン株の蔓延が危惧されて、三回目の接種が始まりかけている。今後のことはなかなか見通せないが、われわれはどんな中にも句作に励み、六月に予定している三十周年記念大会の成功に向けて進んでいきたい。

(吉村 豊)

令和三年度会員名簿

平成の合併以前の町村名まで記載

※印は本部会員

池袋 寛※	宮崎市田野町	遠目塚信子	宮崎市
池水 侃	宮崎市	永田タエ子※	小林市
井上秀子※	宮崎市	長友 巖※	宮崎市清武町
岩切雅人※	高鍋町	仁田脇一石※	綾町
宇田蓋男※	延岡市	服部修一※	宮崎市
大浦フサ子※	都城市高城町	早川たから	宮崎市
岡田真喜子	宮崎市	原田マキ子	西都市
小倉櫻子※	宮崎市	疋田恵美子※	宮崎市
海蔵由喜子※	小林市	福島ミチ子※	都城市
梶原敏子※	五ヶ瀬町	福富健男※	宮崎市
簾谷展良	宮崎市	藤野々子※	宮崎市佐土原町
亀田りんりん	宮崎市	藤田長汀※	宮崎市
川島宏幸※	都城市高城町	藤林伸岳	小林市
倉田玲子※	小林市	布施伊夜子※	宮崎市
黒田律子	宮崎市	踏田 拓	宮崎市
桑原淑子※	宮崎市	山口木浦木※	宮崎市
興梶マリア	宮崎市	吉村 豊※	国富町
清水睦子※	宮崎市	早稲田りょう子※	宮崎市
鈴木康之※	宮崎市		
妹尾題弘	宮崎市		
玉木節花※	延岡市		
檀上 隆	宮崎市清武町		

(四〇名)